
一緒に遊ぼう。

永遠のゲスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一緒に遊ぼう。

【Nコード】

N9918T

【作者名】

永遠のゲスト

【あらすじ】

1人ときはハイテンション、他人がいるときは見た目は普通、内心ドキドキ。

人見知りの激しい心の引き籠もりが色んな人と遊べるはずのオンラインゲームで他の人から逃げ回りながら、いつかはみんなと一緒に遊びたいなあと夢見る話です。

作者はドシロートの為、気を楽しにして、広い、寛大な心で読まれる

ことを切に願います。気分が優れないときは、イライラが悪化する恐れがあるのでご注意ください。

ログイン

人にかかわるのは怖いこと。

自分の都合や思いだけではどうにもならない。

でも、

きつと一人じゃつまらない。

私たちは君を待っている。

さあ、一緒に遊ぼう。

ちゃらら〜

と、そんな感じで始まるオンラインゲームがあつたとき。

じゃあ、始めるか!!



ここは城の近くの平原。
ちなみに城はこのゲームには3つしか存在しない。

3つある城の城下町は初期プレイヤーが始めに訪れる場所だ。

その近くの平原、いわゆる初心者が始めて敵と戦ったりする場所である。

そこに大音量で話している3人組がいた。

「次、どこ行く」

と声を発したのは背の低い女の子。

「どこでもいいけど、なんか私ら注目されてない」

と答えたのは白い鎧を身に着けた金髪の……
女？

あれは確か女性キャラ専用の初期装備だったはず。

「そう言われれば、何でかしら」

最後は黒髪ロングのこれまた女の子。

「私達、かわいいから注目されてるゝとか」

小さい子がそう言って金髪鎧のほうを向く。

「かわいいってゲームのキャラなんだから、他もみんな似たようなもんだろ」

「そうよ。サヤは自意識過剰なんだから」

小さい子はサヤというらしい。
どうでもいいが…。

いい加減耳障りなんで一言、言ったほうがいいかなあ。

ううつ、いやだなあ。

でも、ここで注意しないと心象が悪くなるよな絶対。

後、5秒たって誰も注意しなかったら、言おう、そうしよう。

：

5分たった。

：後5分たって誰も、

「それじゃ、次行こうぜ」

金髪鎧がそういうと他の二人も連れ立って城下町に戻ろうとしている。

『すみません』

決死の覚悟で話しかけたのは私です。

あー、貧乏くじにならなきゃいいなあ。



「えっと、私たちのことですか」

答えてくれたのは黒髪の子。

『はい、失礼ですが皆さんはこのゲームは初めてですか？』

違うと非常に面倒くさいので、初心者であってほしいなあ…

「はい、今日から始めたんですよ！」

「おい！」

耳が…

大音量で返事してくれたのはサヤと呼ばれてた子。
止めたのは金髪鎧。

イヤホンで聞く音量じゃないね…。

「あの、なぜそんなことを…」

黒髪の子から不審そうに尋ねられる。

特に何もしていないけれど、ものすごく不安な気持ちになるのは小心者だからか、女の子に自分から話しかけるなんて無茶をしているからか。

『皆さんの声がこのエリアにいる全員に伝わっていることに気づい

てないのかと思ひまして』

このゲームはボイスチャットと普通のチャットの両方が使用できるのだが、ボイスチャットはデフォルトの設定ではその場にいる全員に声が聞こえる設定になっている為、狭いエリアならまだしもワールドではかなりの人数に会話が聞かれていることになる。

もちろん、特定ユーザーからの声を聞こえないようにも設定できるがこのゲームの特性上、いちいち設定しているプレイヤーはあまりいない。

迷惑行為に分類される会話の垂れ流しは、意図的に行っている場合もあるのでそういう人に注意すると非常に面倒な事態になるので、できればかわりたくなかったんだけど…

「え！」

「本当ですか」

「いつからだろう」

三人がそれぞれ声を上げている。

うるさいからやめてほしいが演技ではないみたいなので口は挟まない。

本当に初心者だったようだ。

良かった、本当に良かった。

『ボイスチャットをつないでから、設定は変更されましたか?』

◆ 5分後

設定についてメニューについているヘルプを見てもらいながら説明し、どうにか周りに声が聞こえない設定に変更完了。

『それでは、皆さんこのゲームを楽しんでください』

さあ、ニゲルカ…。

会話怖い、やっぱり話しかけるんじゃなかった。
特に失敗していないはずだが、いつものように後悔しながらその場を全力で去ろうとしていると。

「あの！」

ナニカ、シツパイ、シタノデショウカ…

Play seriously (前書き)

「 が音声

」 がテキスト

P l a y s e r i o u s l y

「今日これからお時間ありますか？」

はい？

えーと、確かサヤさんでしたか、時間なら一人だからいくらでもあります、何か。

『すみません。急ぎのクエストを受けてまして…』

予定なんかありませんが、とりあえずお断りします。

じゃー！！

「クエスト？」

なぜ、そこで疑問系？

あー、たしかオンラインゲームが初めてって話をさっき聞いたような。

ボイスチャットは履歴が残らないから、うろ覚えだけど。

『クエストというのはゲーム内で受ける依頼のことで、時間制限があるんですよ』

「時間制限？」

『ええ、このゲーム（P l a y s e r i o u s l y）はクエスト

に実際の時間で30分から1週間ぐらいの期限が設けられていて、決められた時間をオーバーするとクエスト失敗になるんです』

「そうなんですか…、すみません。急いでるのに…」

ぐはっ!!

痛い、良心というかストレスで心臓が、心臓がすごく!!

…

だぁー!!

『何かお困りのことでも』

ううつ。

遠慮されたら即座に移動だ。

町は目の前だけど転移アイテム使っても全力でこの場から去ろう。

うん、それがいい、ソレガイイヨ!!

「いやー、色々できることがあるって聞いたので経験者からの話が聞きたいなぁー、なんて思ってたただけなので、大丈夫っす」

と、力強い気がする声が聞けたので少し気が楽に…

ならねえよ。

なんかひどく残念そうだよ！

何だろう、後ろめたいよ！！

特に何も予定なんてないから！！！！

自業自得ですね、わかってますよ！！！！！！

「おい、サヤ。あんまり無理を言ってんじゃないよ」

おおっ、金髪鎧さん。

しゃべらないから席はずしたのかと思ってましたよ。
名前は確か…。

誰でしたっけ？

「何聞いてたのトリちゃん、今大丈夫って言ったじゃん」

軽いブーイングを入れなれながらサヤさんが反論してる。

金髪鎧 Ⅱ トリちゃん

へー。

「何言ってるのよ、かまって欲しそうな声だしてたじゃない」

これは黒髪ロングさん。

この人もいないのかと思ってたよ。

キャラが動いてないときにボイスチャットで無言だといってるんだかないんだかわからん。

「ぶー、ユキちゃんまで…」

黒髪ロング Ⅱ ユキちゃん

みんな2文字ですか。

わかりやすくていいですね。

怖いから呼びません（書きません）けどね。

たぶん女の人をよく知らない人にいきなり名前呼ばれるのはいやですよね。

ええ、きっと。

もしこんな話を人にしたら偏見だって言われると思いますけど…
呼んだときの目が怖いんですよ。コワカッタンデスヨ。

とか、軽くトラウマで怯えてたら、話がついたらしく。

「お時間をとらせてすみませんでした」

ユキさんの台詞とともに3人のキャラがこちらにお辞儀してきました。

形から入るのは良いですね。

私は好きです。

罪悪感が +10 されました。

ぐふっ！

『いえ、たいしたことはしていませんよ』

罪悪感がさらに +100 されました。

うなぎのぼりです。

ほっといたらきつと、来週ぐらいまで気に病むレベルです。

だぁー！ー！！

『皆さん、これからの予定が決まっていなかったのでしたら、ギルドホームに来ませんか？』

話を切り上げようと思ったのに…。
そんなことを書いてました。

重症です。

私の家にやってきた。

時間がないと書いてしまったのでそのことに関しての言い訳をしつつ、ギルドホームに移動しました。

言い訳として品物を納品するクエストには何々が5～10個欲しいと言った感じで依頼される場合があり、最低5個納品すれば失敗にはならないが、当然、数が多いほうが評価は高いので最大数まで稼ぐ為に急いでいたが最低数は持っているので少し時間をもらえれば問題ないという説明でとりあえず逃げました。

ギルドホームに移動しているのでついでに説明するとギルドとは共通の目的を持った人たちの集まり。

……のはず…

このゲームに限らないと思うのだが実は一人でも作れるんだよね、ギルド。

ホーム（本拠地）さえ所有していれば誰でも、一人でもギルド（組合）を作れるんだ…

ギルドホーム、それはギルド（組合）の皆が集まる場所のはずだけど、今は私個人の家なのさ♪

……若干落ち込んだところでギルドホームへ到着。

ギルドホームの外観は木造平屋、3人がけの2つのソファと机で部屋のほとんどが埋まっている客間とベットとタンスがぎりぎり入る個室一部屋というゲーム内で購入できる一番小さい家だ。

これでも購入するまでには色んなイベントが：

無いな。

うん、家主がいなくなって住む人がいないからって貰ったんだ無料で。

：まあ、そんなことは今はどうでもいい。

3人をとりあえず客間に案内しないと。

ギルドホームへ行くことを提案した時、サヤさんは喜んでくれたけど他の二人が若干不信そうな声を出していたような気がするのなるべく迅速な行動が必要だ。

挙動不審だとただでさえ、こちらから話しかけて怪しいと思われる要素が満載なのによますます怪しまれてしまう。

：

いやだあー！

通報は、通報だけは勘弁してください！！

そんなことを考えながら3人を客間に案内した後、大急ぎでその場を離れ、期限が迫っているわけでもないクエストを終わらせるために街中を爆走。

後ろから見られてるかもしれないし、可能な限り急いでる感じで説明した通りの行動をしないと：

急げ！

急げ！！



気がつくど女性と話をする決心をするのに必要以上に街中を走り回ってました！

やべえ！！

急いでギルドホームへ引き返しましたが10分も経ってました。

『お待たせして申し訳ありません』

内心動揺しまくりですが画面上のキャラは必要なことだけやってきましたって感じのさわやかな笑顔をうかべてます。

「もう、いいんですか？」

客間の入り口で棒立ちのサヤさんから返事をもらいました。

別れる前から微動だにしてなかったんですね。

なんというかある意味行儀がいいんでしょうか、こういうのも？

『ええ、立ち話も何ですから皆さんどうぞお座りください。』

「はぁ、座るんですか？」

◆ここから実際には長ったらしい説明をしていますがつまらないので要約すると

1. このゲームには心象と言う数値が表示されない隠しパラメータがある

2. 心象が高いとクエストの報酬が高くなるなど良いことがある

3. 心象をあげる為には礼儀が重要である

(客を立たせたまま会話する家主なんて論外)

「そんな細かいことどうやって調べるんですか？」

『特定のワードを拾ってるだの、人工知能が監視しているだの色々言われていますが詳細はよくわかっていません。ただ同じ依頼を受けても粗暴な振る舞いをした場合と礼儀正しく振舞った場合では明らかに依頼人(NPC)の対応が違うことを色んなプレイヤーが確認しています。』

運営に尋ねた人もいたようですが企業秘密ですとの回答があっただけだとか。

『まあ、ロールプレイの一環と言うことで。慣れればプレイヤー同士でも話しやすくなると言う人もいますし。』

私は他人行儀な方が話しやすいのでボディランゲージをかねてキヤラを細かく動かすのが癖になってるし…

3人に会ってからキャラはずっとさわやか笑顔！

基本だよねスマイル！！

円滑な人間関係を築きてえ！！！！

私の名前は：

全員が椅子に座ったことを確認。

早速本題に入りマース。

変なことを書かないように！

ゆっくり丁寧に！！

がんばれ私！！！！

『経験者の話を聞きたいとのことででしたが。どのようなことがお聞きになりたいのでしょうか？』

結構待たせたので怒ってないかなとキーボードを打つ指を震わせながら待っていると。

「実はオンラインゲームをやってみたいと思って、有名しかも無料で遊べるものをもってことで、このゲーム始めたんですけど何ができるのか良くわかってなくて…」

えへへっと苦笑交じりにサヤさんが答えてくれました。

『確かにこのゲームはいろんなことができるので、何がしたいか決まっていなくて楽しいかもしれないかもしれませんね』

私も最初は色んなところに行ってみたりしたけど町の近くをうろついてたらいきなり強い敵が来て瞬殺されたり、知らない人に話し

かけられたり、知らない人に話しかけられたりー!!!

軽くゲームをやめようかと思ったことがあったなあー。

『1つお聞きしたいのですが、皆さん何かやりたいことはあるのでしょうか』

「やりたいこと。ですか？」

『ええ。漠然とゲームの説明をするだけなら公式ホームページとか見ればよいと思いますので。何かやりたいことがあるようでしたら、それに関係する話をするほうがわかりやすいのではと思いますて。』

チュートリアル的な説明はネットで検索すればすぐ出てくるし、このページ見てくださいですむので、それでもいいかなあと思わなくもないけど。
せっかくならゲームを楽しんでもらいたい。

…なるべく私の見てないところで。

ほとぼりが冷めるまで会わなければ、きっと今日の出会いはなかったことに！

相手が何をしているのか把握していれば、近づかないようにもできるはず！！

てなことを考えていると。

「はいはい。私は綺麗なものが見たいです！！」

元気の良い答えが返ってきました…。

テンション高っ！

「サヤ、うるさい。マイクの近くで大声張り上げない」

いいぞ、トリさん！

「えー。これくらい普通だよ。ねえ、ユキちゃん。」

「サヤちゃん。私たちはいいけど今日知り合ったばかりの…」

うん？

「すみません。そういえばまだお名前をお聞きしてなかったような」

…

そういえば。

お互い自己紹介もしてなかった…

3人の名前もお互いが呼び合ってるのを聞いて心の中で呼んでたけど、こっちから聞いてなかったし。

『すみません。すっかり忘れていました。』

キャラを苦笑させながら。

『私の名前は』

自己紹介と写真

『アルクです。宜しくお願いします。』

アルクを席から立ち上がらせ、丁寧にお辞儀をさせる。

「じゃあこっちも自己紹介を。私はむ「わっー!!」」

突然の大声がイヤホン（耳）を直撃。

「いきなり本名を名乗るんじゃないよ！」

あー。

確かに個人情報流出は怖い！

よくわからないけどなんとなく怖い…

「すみません…」

『気にしないでください』

大声で耳は痛かったが、正直知りたくもないので…

「サヤの自己紹介は最後にするとして。まず、私からキャラ名はトリス。騎士ぽい格好とか好きなんで金髪、青目の長身に設定しました。」

トリスでトリですか…

良かった！

危うく愛称で呼ぶところだった！！

引かれる。絶対に引かれるぜー！！！！

「次は私ですね。名前はユキです。容姿は特にこだわりはなかったんで、日本人ぱく髪と目は黒にしています。」

こっちはそのままユキですか。

ひょっとして、現実の愛称をキャラ名にしたんですかね。

「うおほん。では最後に「本名、名乗るなよー」」

「トリちゃん、うっさい！」

「えーと。私の名前はサキです。現実ではない色にしようと思って髪も目も青緑に設定してアニメキャラって感じにしました。」

サキもそのままと言うことは愛称である可能性が高くなりました。

…別にどうでもいいけど。

今更だが何でこんな自己紹介をしているかというと、このゲームでは名前を聞いたことのない相手の名前は表示されないから。名乗

る前はキャラ名が相手に見えないようになっていたが、名前を聞いた後はキャラの頭の上に名前が表示されている。

テキストはともかく、音声はどうやって認識しているのやら…
まあゲームをプレイする分には何の不都合もないので私は気にしない。

ちなみに名乗った名前が表示されるのでゲーム開始時に登録したキャラ名でなくてもかまわない。ただ、偽名だとばれると一部のNPCの心象が酷いことになるけれど…。



アルクを着席させてようやく本題。

『ではお互いの名前もわかりましたので。改めてやりたいことについてですが』

…

名前書いたほうがいいかな？

大丈夫かな？？

でも名前聞いという書かないほうが失礼か！！！！

…

よし、書くぞ：

テンション下がってきたぜ

『サキさんは確か綺麗なものが見たいと仰ってましたが風景写真とかは好きですか』

「写真ですか」

『ええ、ゲーム内で写真を撮ることができるんですよ』

「えっと、それってスクリーンショットとは違うんですか？」

『そうですね。見てもらったほうが早いのでちょっと待ってください』

アルクの武器をポラロイドカメラに変更。

カメラを構えて写真を3枚撮影。

＊精霊写真1，精霊写真2，精霊写真3を手に入れました。

ポラロイドカメラなんで取ったその場ですぐアイテム化。

取った写真には名前を付けることができるけど今は時間がないので連番。

『どうぞ』

撮った写真を三人に配る。

「うわっ、すごい」

「なんだ、これ！」

「綺麗…」

3人共なかなか好感触。

良かった…

無反応だったらどうしようかと！

「すごい！すごい！なんかちっちゃい虫みたいなのが一杯光ってて
すっごく綺麗」

虫…。

『それはこの家の精霊です。』

「精霊？」

『精霊はこの世界ゲームの色んなものに宿っている日本的に言えばやおよろず八百万の神様みたいな存在です。先ほど心象の話をしましたが精霊にも適用されていて、精霊に好かれている人の周りだとお渡しした写真のようにとっても綺麗に写ります。逆に嫌われているとまったく写らないか、暗く澱んだ感じになります。』

魔法の威力とかにもかかわるけど関係ないので省略。

『あと精霊は特定のアイテムやスキルを使わないと確認できないので、スクリーンショットのようなゲーム外のものでは撮影できません。』

ゲーム内で写真を撮ってから画面に表示してスクリーンショットで保存とかはできるけど画質落ちるし、精霊写真をそのまま印刷できたりもするのであまり意味がない。

「写真かぁ…。うん、いいかも！」

おおっ！

好感触！！

後もうちょっとで話が終わる！！！！

「綺麗だし、悪くはないと思うけど…」

…トリスサンからダメだし入りマース。

写真は続くよ、どこまでも

「この写真って経験値やお金になったりするんですか」

「トリちゃん、現実的過ぎ。いいじゃん別にそんなの」

「大事なことだよ。特に私ら初心者なんだから。」

まったく持ってその通りです。

別に考えなしに進めたわけでもないけど、申し訳ない気持ちに：

『カメラはアイテムの種類としては武器になるので敵を倒せば経験値は手に入りますが、ゴーストなどの実体を持たない相手以外には特殊能力付きのカメラでないとダメージを与えられないうえに、弓の矢と同じでフィルムが消耗品なのでかなりお金がかかります。なので正直初心者向きではないですね。』

「ダメじゃないですか！初心者にそんなの勧めないでくださいよ！」

：

：

：

…心が碎ける音が：

：

：

：

…かろうじてしなかった。

ま、負けられねえ…

こんなところで負けてたまるかぁー！！！

説明を続行するぜえー！！！！

：

…正直、全てを忘れて眠りたいデス…

『サヤさん。こちらのアイテムを差し上げます』

「えっ」

＊アルクはサヤにデジタルカメラを渡した。

「何ですか、これ」

『所謂初心者用のアイテムでレベルや能力が低いときしか装備できない代わりに高い性能を持っています』

このゲームでは初心者用アイテムは難易度の高いクエストを複数

クリアしないと手に入らないという、よくわからない仕様なので初心者用アイテムを装備している初心者は滅多にいないけど。

せっかく苦勞して手に入れたのに使えないと悲しいので人を誘って一緒に遊ぼうって感じなんだと思うけど、初心者用アイテムを手に入れる為の時間、パーティ組んでレベル上げればあつという間に初心者アイテムを装備できないぐらいまでレベル上がるけど…

そんな話は置いてデジカメの説明を。

『お渡ししたデジタルカメラはフィルムが不要で撮影できる枚数に制限がないと言う2つのメリットがあります。デメリットとしては攻撃力が0なことでフィルムを消費しない代わりにMPを消費することぐらいです』

「ぐらいですって、攻撃力0じゃ戦えないじゃないですか」

『ええ、ですが1レベルの皆さんがいけるとところで実体のない敵が出るようなところは殆どありませんので、あまり気にする必要はないと思います』

「それじゃ、その辺で写真だけ撮ってろと…、レベルも上げず、お金も稼がず…」

怒ってる、トリスさん絶対怒ってるよ!!!!!!

…無心だ…

……無心になれ…

……考えるな、感じるな、勢いに任せろ：

………考えちゃダメだ、考えちゃダメだ、気にしたら死ぬ（精神的に）

『カメラに限らず、基本的に敵を倒しただけではお金は手に入りません。クエストの報酬や爪や牙などの換金アイテムを手に入れることができるだけです。そしてカメラは敵と戦わなくても必ず換金アイテムが手に入ります』

「…さっきの精霊写真ですか」

『はい、精霊写真には2つの種類があります。1つは敵を倒したときに手に入る討伐写真。これは倒した敵によって一定の値段で売ることができます。もう1つは先ほど渡した精霊写真です。これは風景や人物などを撮影したのですがこちらも売ることができますし、良いものなら経験値を得ることができます』

「売れるのはわかりますけど経験値も手に入るんですか？」

『はい、経験値と言うと敵を倒して手に入れるイメージを持っている方が多いですが写真を撮ると言う経験をしたのですから経験値は入ります。まあ、同じ写真をずっと撮り続けても経験とは呼べないので、良い写真が取れたときだけです』

「はい、質問。良いとか悪いとかどうやってわかるんですか」

『大きな町には写真館と言う場所がありますので、そちらで店員に
ノンブレイヤーキャラ
判定してもらうことになります』

「それって私がすっごくかつこいいと思っても、経験値がもらえないってことですよね。なんかそれは嫌かも…」

ノンプレイヤーキャラ

『店員の判定が嫌ならコンクールに出展するという手もあります。コンクールは週に1度、プレイヤーが写真や絵などについて評価すると言うもので大勢の支持が得られれば写真館で判定するより多くの経験値が得られますし、高い評価を得られた物はかなりの高額で売ることが出来ます。』

「プレイヤーが判定って、どうやってやるんですか」

『写真館のほうでクエストが張り出されているので、そちらでクエストを受けてコンクールに出展された写真を受け取り、期日までに5段階の評価と感想を書くといった感じです。出展数が多いのかかりの時間、拘束されますが評価自体は簡単なアンケート見たいなものですし、報酬がいいので真剣に評価してくれるみたいですよ。』

全員に同じ評価を付けたとか適当なことを繰り返していると、クエストを受けられなくなるとかペナルティーがあるらしい。

「ううっ、そっちの方が自信ないかも。他には無いですか」

『個人で写真展を開いて経験値やお金を入手することも出来ますが、これは初心者にはキツイです。出展する場所のレンタル代がかかりますし知名度が低いのでそもそも人が集まりません。さっきのコンクールで上位を取った人とかなら別なんですけど…』

他になんかなかったかな…

「サヤ、とりあえず写真撮ってみてからでも良いんじゃないかしら。

良いも悪いもやって見なきゃわからないしね」

「そうだねえー」

：

「…うん！、悩んでもしょうが無いことは気にしないで、とりあえずやってから考える！」

「あーあ、サヤさんのスイッチが入っちゃったよ……カメラを使うのは確定かな」

「良いじゃない。あなたも途中から乗り気だったんでしょ」

「まあ、物によっては高額ってのが心引かれるよね」

◇

：

：

…無心…

『あとは新聞とか雑誌を作るって手もありますね』

「はい？」

全ての記憶をぶっ飛ばせ

◆ …朝になった。

…

えーっと。

何してたっけ…

「まあいいか、思い出せないならたいしたことじゃない」

なんかすっきりしないけど、今日も一日適当にがんばろう。

◆ 14時間経過

「はあ…。今日も疲れた…。…」

特に何もなかったのになぜか疲労だけはたまるなあ。

今日もちょっとゲームしてから寝るか。

昨日、ゲームを止めたあたりの記憶が曖昧だし、なんかクエスト進

めてたかもしれないしな。



ログインしてすぐ視界に飛び込んできたのは新聞やら雑誌やら広げてほったらかしにされているギルドホーム。

：

：

：

：

お…

思いだ………せない。

えーと。

確か誰かにカメラの説明をしてたような。

それから……それから確かプレシャーに負けないように徹底的に無心になって…

寝た！

：

：

いやいや、それだとアイテムが広げである意味がわからん。

あの後も会話をしたことは確かだろう。

綺麗さっぱり忘れたけれど：

考え事をしながら歩いていたら、目的地を通り越してその間の記憶がなかったりといった経験はしたことがあったけど人と会話してた内容を完全に忘れるのは初めてだなあ。

最初から最後まで聞き流して後で思い出せないとかならあるけど：

とりあえず、広げてる物をしまっって何かなくなっっていないか調べるか。この分だとアイテムをあげたのかもしれないし。



結果、3つの初心者用アイテムがなくなっていることがわかった。

1つはデジタルカメラ。

これをあげたのは覚えている。

残りは無限玉と必中の弓。

無限玉は所謂煙玉で主に逃げるときや遠距離攻撃を仕掛けてくる相手への目くらましに使う。

まあ名前からわかると思うけど、使用回数に制限がなく1つ持っていればいくらでも使える。ただし1度使うと10分間経験値が得られなくなるデメリットがある。

まあ、初心者が高レベルの敵が出てくるところに迷い込んだとき用のアイテムなんだと思う。

そして必中の弓。これも名前そのまま必ず射った矢が当たる弓。ただしこれもデメリットがあって攻撃するまで3分の準備時間、再攻撃するまでに10分の待ち時間、さらに狙いをつけている間は完全に無防備で一步も動けないというオマケ付き！
固定砲台になるしか道がない武器だけど戦闘システムの関係上、それでもメリットは大きい。

このゲームでは急所に攻撃が綺麗に決まると一撃死スーパークリティカルとなる。それはどれだけ体力が残りヒットポイントていても相手を倒すことが出来るのでレベル1の初心者がレベル100の上級者を倒すことも可能となる。

まあ、1レベルの時しか装備できないんで一度敵を倒してレベルアップしたら装備できないし、入手難度も高いから数をそろえるのも困難ってことでプレイヤー同士の戦いではあまり役に立たないから例に挙げたように初心者が上級者を倒すってよりは上級者に連れて行ってもらって、高レベルのモンスターを倒して一気にレベルアップするとかが普通の使い方だと思う。

渡したアイテムから考えると無限玉で時間稼いで必中の弓で敵を倒して一気にレベルアップしてくださいって感じの説明をしたのかなあ。

カメラと全然つながらないけど…

⋮

⋮

⋮

わからん。

⋮

⋮

よし！

旅に出よう！！

ここにいて再会したらどうする！！！！

失礼なことをして非難されたら……もうこのゲームにはいら
れない！！！！！！

人のうわさも七十五日《2ヶ月半》。逃げ切つてやるぜ！！！！！！

うおー！

耕せ世界の全てを

うおー！！

『いい加減にせんか！』

いいところで邪魔スナ！

アーンと内心、チンピラ風に声をかけてきた相手のほうを向くと見覚えのある爺さんが息を切らせながらこっちに來ているところだった。

『これは村長。このようなところにおいで下さるとは、何かトラブルでもあったのですか？』

『何を不思議そうにしたら、今のこの状況がわしが來た理由じやとなぜわからん』

『はて、私は村長に依頼された通り畑を耕していただけですが』

何をやっているかと改めて説明するほどでもないですが、あの後、人に会わないように大急ぎで王都を飛び出し、人《NPC》が少ない田舎に移動していたところ道の真ん中に立て札があり依頼が張り出されていたので、特に目的がなかったので受けることにしました。

『そうじゃな、わしは確かにこの辺の荒地を野菜が育てられるようにして欲しいと言った』

今回のクエストは単純に荒地にある岩だの倒木だの邪魔な障害物

を排除して、その後はただひたすら土を耕すというものでした。障害物をぶち壊すのはなかなか楽しかったけど土を耕すのは地味だし、単純作業だし苦行以外の何ものでもないよね。

：

：1週間そればかりやってたけどね！

単純作業。

それは雑念を払い悟りを目指すには最適なのさあゝ

：

別に悟りを開く気はないけどね！

余計なことを考えたくないときってあるよね！！

だから与えられた仕事をただひたすら1週間がんばったんですよ。

『1週間苦勞しましたが、見渡す限り全て畑にすることが出来ました』

若干誇らしげな気持ちで周りを見回していると。

『それがおかしいんじゃないか』

『王都がすっぽり入るほどの広大な土地を畑にしまいおって、こんなに誰が管理するんじゃないか！』

はっはっはっ、さあ。

『ですが、依頼の内容は村長が依頼完了と言われるまでこの辺一帯を耕せというものだった筈です』

契約違反はしてないよ。

『普通は、普通はな1ヶ月あってもここまでにはならんのじゃ…』

『そもそも、この土地にはモンスターもおるんじゃ、1人でモンスターと戦いながら土地を耕すことが出来るなど誰が思うか』

あー、それで最初契約したときに追加の人員がどうのと言っていたのか。立て札を見て依頼クエストを受けに来たのが私しかいないんでしょうがないから王都の方まで依頼を出しに行ってたんだっけ。
1人で問題ないって言ったのに：

『モンスターなら最初に瓦礫を撤去するときに倒して、この辺を囲うように結界石をおきましたから当分現れないと思いますよ』

□

結界石は簡単けっかいせきに言うとかキャンプ用品。結界石を置いておくと石の周りに置いた人のレベル以下のモンスターが近づかなくなるというアイテム。置いた人以下のレベルという制約があるし石の置き方や置いた数によって効果時間が変動するので結構めんどくさい微妙に使いにくいアイテムである。最初は全てのモンスターが近づかなくなるという、すごいアイテムだったが、強敵の目の前で結界石を置いてダメージを受けたら逃げ込むといった戦法を取るプレイヤーが増えたので性能が下がった。

ドラゴンなんかの伝説のモンスターが石ころに近づけませんっていくらなんでも間抜けすぎるといふ意見が出たんだとか…
想像すると確かになんか情けない感じが…

□

『結界石…。あれ1つで報酬の5倍ぐらいの値がするはずじゃな…。それをこの広大な土地を取り囲むのに使ったじゃと…』

今回の依頼クエストの報酬は1万G。
ちなみGは単純にジーと読む。

初心者が倒せる一番弱い敵を1体倒して手に入るアイテムを店で売ったときの値段が3Gで一番効果の低い回復アイテムが100G。1万Gがそんなに高い報酬ではないとわかってもらえるだろうか。

『いったいいくつの結界石を使ったんじゃ』

『1000個です』

5万×1000 5000万G

『えっ…』

あ、固まった。

…

『アホか貴様は！』

おお、再起動。村長（老人風 60〜70歳ぐらい）が顔を真っ赤にしてアルクに掴み掛かってきた。
取り乱しとる、取り乱しとる。

『何か問題が』

しれっと言ってみた。

『…そんな金払えんぞ』

せこいなあ…。

『私が勝手にやったことですから代金を請求する気などありませんよ』

大量に持ってたアイテムを捨て…ゲフツ 使っただけなので代金なんかいらなそうですよー

『そっそうか。すまんのう。何分ここは辺鄙なところにあるせいであまりお金がなくての…』

大雑把に説明するとこのゲームは大きな1つの大陸とその周辺の島国で成り立っている。大陸の真ん中に王都、大陸の西の端に廃都、大陸の東の端に聖都という3つの都市があり、その周辺に村や町が点々と存在している。大陸を横断するように人が住んでいるところが広がっているので大陸の北や南は手付かずの未開の地ということになっている。

この辺は大陸中央の王都から南に進んだところにあり、ある意味最前線に位置するのだがダンジョンがあるわけでもなくレア素材が取れるような敵がいるわけでもなく、まあなんというか将来的には何かありそうだけど、今は特に何もないイベント予定地みたいなところである。なのでプレイヤーがこない。プレイヤーがこないの^{ノンプレイヤーキャラ}商人もいない。そんな状態なのでお金が出て行くばかりで貯まらない。どうしようかとなったときに考えたのが名物商品の開発だそう

だ。
モンスターは基本的に肉食が多いので家畜を飼うより危険が少ないと言うこともあり野菜作りをすることにしたらしい、それだけ理由ではないそうだが詳細は聞いていない。行き当たりばったりで破綻するのが目に見えるダメな村おこしみたいだなあと思ったのは村長には内緒である。

『畑はとりあえずもう十分じゃ。あとはこの種を植えるだけじゃ』

金額の大きさに当初のツツコミも忘れて話を進めているが、それでいいのか村長。

『契約は畑を耕すだけだったので聞きませんでした、この畑に植えるのは何の種なんですか』

あふれる農業魂でただひたすら地面を耕すことしか考えてなかった
ので聞いてなかった。

『わからん』

『はい？』

：

：

正気か爺さん。

『そんな、ボケ老人を見るような目で見んでくれるか…』

なぜわかった。アルク表情は変えていないぞ！

『何のことでしょう。しかし、何の種かもわからない物を植えて大丈夫なんですか』

『何かはわからんが良いものであることは確かなはずじゃ』

『と言うと』

『我が家に代々伝わっている家宝での、村が窮地に立たされたときに育てるように言われておったのじゃ』

イベントフラグ来たー！

イベントが発生した。

結論から言おう。

イベントは発生した。

「ぐわ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ」

大音量の咆哮を発しているドラゴンがその結果である。

『……どうすんじや。これ』

•
•
•

どうしようもないだろ、さすがに……。

いくらなんでも画面に収まりきらないほどの巨大なドラゴンを一人でどうしろと。

『どうすんじやこれええええええええええ』

□

そもそも何であんなのが出てきたかと言うと村長が植えた種と土地を耕しているときに肥料としてばら撒いた物が原因らしい。村長が植えた種は迷宮の種と呼ばれるもので植えると周囲の土地の力を^{ダンジョン}吸収して迷宮を作り出すというもの。

何でそんなものを村が窮地になったときに植えるかというと、迷宮^{ジョン}は実は周辺のモンスターを呼び集めて中に閉じ込めるといふ、どつかの害虫駆除用品みたいな効果があるからだと思う。

このあたりの土地は周辺にモンスターがいるせいでなかなか畑を広げることが出来ず、モンスターに襲われるので家畜を飼うことも難しかった。ならモンスターさえいなければ畑を広げることにも出来るし、家畜だって飼うことができるってことで迷宮^{ジョン}を作ることが村を救うことにつながるということだったのだと思う。

本来は：

何で迷宮^{ジョン}がモンスターになったかと言うと迷宮^{ジョン}の種の説明に周囲の土地の力を吸収とあるが、おそらくこれがいけなかった。耕している最中に倒したモンスターの死骸や栄養剤代わりに適当に地面に打ち込んだ回復アイテムなど、なんか混ぜといたら面白い野菜が取れるんじゃないかという悪ふざけの結果が迷宮^{ジョン}の種に吸収され、モンスターとして誕生したらしい。サイズが耕してた土地と同じになると言うオマケ付きで。

□

さあて：

：

依頼もすんだし、そろそろログアウトしようかな♪

『村長。混乱されているところ申し訳ないのですが依頼^{クエスト}の完了証明と報酬をいただけますか』

『はいや、それどころじゃないじやろうが』

『村長、それはそれです。』

『じゃ、じゃが、このままだと村が壊滅しそうな気がするんじゃが』

『まったく同感です。だからなるべく早くお願いします』

『鬼かお前は！
 そもそもこうなった原因はお主にもあるんじゃない？
 それを』

『私は契約どおりに行動しただけですし、種を植えたのは村長でしょう。私は本当に大丈夫か確認したじゃないですか』

『うぐ』

そう今回の依頼はあくまでも畑を広げること、そのために邪魔なモンスターを排除することの2件である。畑から生えてきたドラゴンの討伐ではない。

[illegible]

ドラゴンが吼えたと同時に今までじっと動かなかったのにゆっくり北の方向に移動を始めた。

「い
か
ー
ん
！」

『どうしてですか、このままの方向に進むのなら村は無事でしよう』

村は今いる場所より南に位置しているので進行方向からは外れている。

『阿呆。ここから北には何があると思うとるんじゃ！』

ここから北…

王都があるな…

『このままだと壊滅しますね。王都…』

南無…。

『壊滅しますねじゃないわ！ 何とかせい』

このままだと王都にあるギルドホームもろとも壊滅しかねないの
で、ほおっておくわけにも行かないが…

さあて、どうする。

巻き戻して、進む

◆6日前 王城北門前広場にて

王都は周囲を壁で取り囲まれており、中に入るには東西南北にある門の何れかを通る必要がある。

門から伸びる道は城につながっており、道の周りには主な商店が立ち並んでいる。プレイヤーも露天を出しており常にかなり人通りがある状態となっている。

その為、道沿いの物件はプレイヤーに人気が高く、目ぼしい物件は既に押さえられていることもあり、売りに出されたときの値段は天井知らずである。道沿いにホームを構えることが一流ギルドのステータスとも言われている。

ちなみにアルクのギルドホームは王都の南東の端にある。南門にも東門にも遠く、殆ど民家しかないので人通りが少なくプレイヤーは滅多に近づかない場所にある：

アルクがギルドホームの場所を何を重視して選んだかについてはさておいて。

王城北門前の広場にログインしてきた3人の女性キャラ、サヤ、トリス、ユキは喋りながらある場所を目指して移動している。

「この道をまっすぐで良かったんだっけ」

「何回も説明したろ。この道をまっすぐ行って剣と盾が書かれた看板を出してる建物が冒険者ギルドだよ」

冒険者ギルドとはこの世界でもっとも所属プレイヤーが多いギル

ドである。次いで人数が多いのが商人ギルドと生産ギルド、この3つを称して3大ギルドと呼ばれプレイヤーの半分は3大ギルドのどれかに属していると言われている。

人数が増えた主な理由が名前が運営が用意したものみたいだったので所属しないと依頼クエストが受けられないのかと思ったからと言う笑い話もあったが、今では3大ギルドと言う呼び方がNPCにまで浸透しており、ある意味運営にも認められた存在となっている。

「冒険者ギルドかあ。なんかそれだけ聞くとガラの悪い人多そうな感じだよな」

どこか不安そうな声を出したサヤにユキが優しく尋ねた。

「冒険者ギルドに所属するのが嫌になったの。サヤちゃん」

「そうじゃないけど、うまくやっていけるかなって」

不安そうな声を出しているサヤにトリスは自信ありげに答える。

「そんなもん、行ってみないとわかんないって。それに合わないなら他の商人なり生産ギルドに所属してもいいんだし」

「わかってるけどさ。あゝあ、やっぱりあの時、アルクさんのギルドに入れてもらえばよかったんだ」

不満そうなサヤにやれやれといった感じでユキが返す。

「はいはい、それはあの時断られたし、サヤちゃんも納得してたじゃない」

「ぶ」

サヤはブーイングを入れるが特に反論はしない。

そんな会話をしているうちに3人は冒険者ギルドに到着した。

3人は建物の中に入りあたりを見回している。

建物の内部は受付と思われる衝立で仕切られたスペースと3、4人座れそうな椅子がセットで5つ設置されている。待合室と思われる場所には10人ぐらい座れそうな大きなソファが2つおり、イメージとしては中規模の銀行や郵便局といった内装となっている。2階に上る階段も奥に設置されているようだが上級者用と書かれたプレートが天井から垂れ下がっており、今の3人では立ち入れない雰囲気醸し出している。

「まずは登録しないと。登録用の受付は5番だってさ」

トリスが受付の上に書かれた説明を見ながらそう言うと3人は5番と書かれた受付に移動した。

「すみません。登録したいんですが3人一緒をお願いしても良いですか」

受付の女性にトリスが尋ねると男性の声で返事が返ってきた。

「かまいませんよ。どうぞお掛けになって下さい」

「……」

3人とも固まった。

登録、次回に続く

受付の女性？は金髪、ツインテール、メイド服、猫耳、ロリっ娘と狙いまくった容姿をしているのだが、聞こえてくる声は台詞は丁寧だが男の声。

そこはいっそテキストで喋れよ！と誰しもツツコミを入れたくなる状況だが不意をつかれた為、3人とも無言で固まってしまった。

「3名様の登録ですね。まずはこちらの用紙に必要な事項を記入して下さい」

3人が固まっていると受付の女性？は慣れているのかそのまま話を進めてきた。

「あ、はい」

いち早く復活したトリスが答えるが他二人はまだ固まっている。

「ほら！ 2人とも早く書いて！」

トリスに声をかけられようやくサヤとユキも用紙を受け取り、必要事項の記入を始めた。

用紙に記入する内容は以下の通り。

- ・名前
- ・レベル
- ・プレイ時間
- ・主要武器

素早く記入し、3人は用紙を受付の女性？に渡した。

「拝見します」

3人が記載した内容は

名前	.. トリス
レベル	.. 1
プレイ時間	.. 5時間
主要武器	.. 剣

名前	.. サヤ
レベル	.. 1
プレイ時間	.. 5時間
主要武器	.. カメラ

名前	.. ユキ
レベル	.. 1
プレイ時間	.. 5時間
主要武器	.. 弓

「確かに受け取りました。ギルドカードを作成いたしますので、しばらくこちらでお待ち下さい」

そういうと女性？は席を立ち、受付の奥に移動した。
女性？がいなくなったことを確認したサヤはトリスに小声で話しかけた。

「今の人って男の人だね。何で女の子キャラ使ってるんだろう。ゲームだし別にいいんだけどあんなに可愛い系でまとめてるんだし、せめてボイスチャットは止めたほうがいいんじゃない？」

「ちょっと待て、サヤ。さっきの人に聞こえたら困るだろ。こういうときはPTメンバ^{プレイヤー}ーだけに聞こえるように設定を変更してから喋って」

「あ、ごめん」

サヤがあわてて設定を変更している間にトリスはネットの情報サイトで冒険者ギルドについて検索をかける。

「お、あった。えっと」

情報サイトに記載されていた情報を簡単にまとめると

1. 冒険者ギルドの受付は冒険者ギルド所属のプレイヤーが担当している
 2. 時間をとられるが、その分冒険者ギルドからの報酬がよくそこそこ人気である
 3. 男キャラと女キャラが受け付けを担当したとき女キャラのほうが行列が出来る
- といったことが多発した為、男性キャラが受付を担当するときは変身用の

アイテムが支給される

声についてはプレイヤーの任意だとのこと。既に男性が女性キャラを使用している場合があることは周知の事実となっている為、ある程度慣れたプレイヤーは声についてはあまり気にしていないらしい。

確認した内容をトリスが他の2人に伝えていると受付の女性？が戻ってきた。

「お待たせしました。こちらが皆さんのギルドカードになります」

受付の女性？は3枚のギルドカードを各人に手渡す。

「これで皆さんは冒険者ギルドの一員となります。冒険者ギルドのシステムについて説明は必要でしょうか」

「ネットにある冒険者ギルドのサイトに書いてあった注意事項は読みましたから大丈夫です」

トリスが説明は必要ないことを受付に伝える。

「わかりました。これで登録は終了となります。早速、依頼クエストをお受けになりますか」

受付の女性？の言葉にトリスはサヤとユキの方を向く。

サヤとユキは軽くなずく動作をするとトリスは受付の女性？に向かって遠慮がちに言葉を発した。

「すみません。依頼クエストを受けるんじゃないくて冒険者ギルドに1つ仕事を頼みたいんですが」

提案は爆発だ！

「依頼ですか。…ああ、初心者の方でしたね。討伐依頼の付き添いでしょうか」

冒険者ギルドでは登録したばかりの初心者と上級者で依頼を遂行してもらうといったこともよくあるので受付の女性？は今回も同じだろうと思いトリスに確認する。

「いえ、お願いしたいのは冒険者ギルドの見学です」

「ギルドの見学ですか」

「はい、私達はこのゲームを始めたばかりなので実際にどんなことができるのか。他の人たちがどうやってプレイしているのかを見てみたいと思ひまして」

「1つ確認したいのですが、それは冒険者ギルドに所属しているプレイヤー全体について仰っているのでしょうか」

「はい」

トリスは即答。

「大変申し訳ないのですが難しいと思います。ギルドに所属しているのは皆さんと同じプレイヤーです。中には自分のプレイスタイルを他の方に見てもらいたいという方もいるとは思いますが、いきなり見学させて欲しいと頼んでも良い返事はもらえないでしょう」

「報酬が良くてもだめですか」

「報酬ですか… 初心者の手に入れられるアイテムやお金では無理だと思いますが」

「これなんですが」

トリスは受付の女性？にアイテムを見せる。

「……これをどこで」

「親切な方に貰いました」

「少々お待ち下さい」

受付の女性？はそういうと席を立ちその場を離れる。

「ダメそう？」

サヤはトリスに現在の状況について尋ねた。

「どうだろ。アルクさんの言ってた通りにはみたけど。正直、突然見学させてってさすがに無茶だしね」

トリスは自信の無さそうな声で答える。

3人がそんな話をしつつ待っていると受付の女性？が戻ってきた。

「お待たせしました。支部長が依頼について相談したいとのことですので2階に移動していただけないでしょうか」

◇ 冒険者ギルド2階 支部長室

「始めまして本支部の支部長を勤めております。クインと申します」

冒険者ギルドの支部長とはギルドマスターからギルドメンバーの登録、削除を行う権限を与えられたプレイヤーを指す役職である。

「始めまして、私はトリス。後ろの2人はサキとユキと言います」

クインは3人に席に座るように促した。3人は支部長室に置かれた3人がけのソファーに座り、クインはソファーの対面に置かれた1人がけのソファーに腰掛ける。

「まず、始めに確認させていただきたいのは依頼の内容です。見学のことですがどのような形で考えておられるのでしょうか」

「ええっと、細かいことは考えていないんですが5分から10分ぐらいの時間でどんなことをしているとか、こんな面白いことが出来ますとかを紹介してもらおう形が良いんじゃないかと考えています」

「それは……」

「私達3人だけにといった話ではなくて、他の人たちにもこんなことが出来ますということを知ってもらえるようなイベントに出来ないかと……」

トリスはクインの台詞をさえぎるように捲くし立てるが最後の方

は自信が無いからか声が小さくなっている。

「イベントですか。先ほどの報酬を賞品として出品すればある程度の人は集まるかもしれませんね」

「じゃ、じゃあこの依頼受けてもらえるんですか！」

サヤはクインの言葉にうれしそうな声をあげるがクインはそれを否定するかのように首を横に振る。

「賞品としてあの弓を出すとになるとこちらで受け取る報酬が無くなってしまう。それに開催場所のレンタルやイベントの告知と言った事を考えると必要経費はかなり高額になると予想できます。」

クインは申し訳無さそうな声で3人に依頼が受けられない理由を説明していく。

「足りないのはお金だけですか」

クインの言葉を聴き、トリスが尋ねる。

「他にもありますが必要経費をいただけるのなら、ギルドで肩代わりをすることが出来る範囲です」

「このアイテムを売却したらその必要経費にならないですか」

トリスはクインにアルクから譲られたアイテムを見せる。

「……無限玉ですか。必中の弓も無限玉も殆ど出回っていないレアアイテムなのですが…」

動揺したのかクインの声は少し震えていた。

■ その頃のアルク

導火線に火を点けろ♪ 走れ！ 逃げろ！！ 爆発だあ！！！！

畑を耕す依頼クエストを受けて1日目。

1人で畑を耕しているとトカゲッぱいモンスターに取り囲まれたので手持ちの爆薬でぶっ飛ばしました。

こっうっや！ あっそれ！ さっらっち♪

はっはっは。1人って最高！！

……

……

虚しくなんか無いんだからね！

アイテム説明

アルクが3人に渡したアイテムは初心者用としているが使い方によっては高レベルのそれこそイベントに出てくるボス攻略にも使えるアイテムとして有名だったりする。

ボスモンスターの弱点に攻撃を加えてもプレイヤーと違って一撃死することは滅多にないので気にする必要がない場合もあるが、中には特定部位を破壊しないと倒せないといった初見殺しも存在する。

必中の弓の最大の利点はアバウトに狙いをつけても必ず弱点に向かって矢が飛んでいくことにある。

初見の相手に使用することで弱点をすぐに発見でき、何度も挑んで弱点について情報を集めるといった手間を省くことが出来る。

特にそれだけなら情報サイトなどに攻略情報が出てくるまで待てばよいと言う話だと思うが、イベントボスを1番最初に攻略することには1つ利点がある。

それは称号を得ることが出来る点である。

称号は特定の条件を満たすと手に入るものでパラメータに補正を受けることができる。ただ1度誰かが取得すると同じ条件を満たしても手に入れることが出来ない。

たとえばドラゴンスレイヤーは一番初めにドラゴンを討伐したプレイヤー又はパーティに与えられる称号でドラゴン系のモンスターに与えるダメージに5%の補正がつくといった感じである。

称号を手に入れる方法は色々あるがイベントボスを倒すのが手っ

取り早く、周囲から羨望を集める手段としてわかりやすい為、1番にボスを倒すために必中の弓を求める声は多い。

そして無限玉これを使う利点は目くらましではなく使用後の10分間の経験値取得制限である。

必中の弓は1レベルのプレイヤーしか装備できない為、経験値取得をコントロールしないと使いたいときに使えないという場面が発生する。

無限玉を使用しておけば10分間は経験値がまったく入らないので、細かい計算をすることなく必中の弓を使い続けることが出来る。

ちなみに戦闘中に死んだ場合も経験値は入らないが称号が取れない。

ゲーム全体で必中の弓は6個、無限玉は8個しか存在を確認されていないアイテムでトリス達が持ち込んだのは新発見の7個目と9個目となる。

販売目的で所有しているプレイヤーもいる為、実際に使用するプレイヤーの数はさらに少ない。

そんなわけでトリス達の無茶な依頼は受けるのは難しいが断るのも勿体無いとクインに判断され、後日冒険者ギルドの全支部長及びギルドマスターを呼び出しての会議を開催することとしてその場は解散となった。

■ その頃のアルク2

1個、2個、3個、4個…

なのに私はゲームをする。

答えなんてでないけど…

…

…

さすが深夜テンション、無駄にブルーになったぜ！

話し合い

◆ 冒険者ギルド本部内会議室

冒険者ギルドの本部はギルドを立ち上げたときに購入したギルドホームを使用しており、王都と廃都の中間に位置する町にある。

本部では依頼を受けたりすることはなく、プレイヤー主催のイベントなどの企画をするときの場合として使用している。

今回はトリス達の依頼を受けるかどうかを話し合うため4人の支部長とギルドマスターが集まった。

『やっほー♪、皆久しぶり♪』

やたら♪を付けたテキストで話かけたのは冒険者ギルドのギルドマスター。

キャラの容姿をショタ属性で固め、常に笑顔を振りまく冒険者ギルドのマスコットの存在である。

『お久しぶりです。ハルモニアさん。』

最初にギルドマスターの挨拶に答えたのは王都南門支部の支部長。キャラ名はフォー。腰まである長髪にメガネ、ゆったりとしたワンピース、良い所のお嬢さんといった感じにまとめた容姿をしている。

「久しぶりハルさん。相変わらずテンション高いねえ」

次に答えたのは王都東門支部の支部長デューエ。真っ赤なフルプレートに身を包んだ、はげ頭のごついおっさん。

ちなみにプレイヤーは女性である。

『♪♪♪』

『♪だけを打ち込むな。鬱陶しい』

呆れたような声でツツコミを入れたのは王都西門支部の支部長トウリ。

黒いローブにモノクルという、いかにもな魔法使いルックに身を包んだ女性キャラ。

「まあまあ、いつものことじゃないですか」

最後に発言したのは王都北門支部の支部長クイン。

緑色のマントにメガネをかけた草食系男子な見た目をしている男性キャラ。プレイヤーの性格もキャラの見た目どおりなので支部長の間では面倒ごとを押し付けられることも多い男である。

「挨拶はこのぐらいにして本題に入りたいと思います」

『オッケー♪ クイン君。ヨッロシク♪』

ハルモニアの返事を見て、クインは全員に今回の経緯を簡単に説明する。



『これは思ったよりも面倒な依頼かもしれないね〜♪』

クインの説明を聞きハルモニアは困った表情を浮かべつつ答えた。

『新人勧誘のイベントとして悪くない案だと思いますけど』

フォーはハルモニアの言葉にたいして自分の感じたことを伝える。

『いや、うちだけだと微妙だ。うちの活動のメインは討伐と採取だから。イベントで説明と言われても難しい』

「たしかにねえ。簡単な説明だったらギルドのホームページでも見ればいいし。依頼を受けるときの交渉なんかもあるけど、NPC相手に見学させて下さいってわけにもねえ」

NPCから依頼を受ける時に関係ないプレイヤーを大勢連れて行くのはこわもての人間を後ろに並べて交渉するようなものなので脅されていると思われる。

そのときは良いかも知れないが心象が下がるので後々困ることになるのはわかりきっている。

『この依頼を新人勧誘イベントとして成功させようと思うと、うちだけじゃなく商人ギルドと生産ギルドの協力が必須だろう』

『確かに……。ちょっと疑問に思ったんですが3人の初心者さんは何でうちに依頼を持ってきたんでしょうか？』

冒険者ギルドは基本的にプレイヤーに対する依頼の仲介が主な活動の為、トリスたちの望むゲーム内で出来ることの実演となると商人ギルドや生産ギルドに比べると弱い。

生産ギルドは写真や絵などプレイヤー自身のセンスが必要なこと

も行っているので実演も行えるし、宣伝にもなる。

商人ギルドは販売方法や相場の変動などいろいろな要素があるので説明文を読むだけではわかりづらいと感ずることもあるので新人相手なら損をしない為に経験者に説明を聞いてみたいと思う人は多いだろう。

『クイン、1つ聞いていい♪』

「何でしょう」

『今回、依頼を持ってきた新人さんに必中の弓と無限玉を渡したのはだれなの♪』

■ その頃のアルク3

……

……

……

……

何にも変化がない。

ただのソロプレイヤーのようだ。

何事も無かったかのように

「ギルド”第三の手”のアルクと名乗っていたそうです」

『へえ♪まだこのゲームを続けてたんだね♪最近名前を聞かなかつたから辞めたのかと思ってたよ♪』

『知り合いなのか？』

『うん♪冒険者ギルドの創設メンバーの1人だよ♪今はもうギルドから抜けているけど♪』

冒険者ギルドは依頼を効率よく見つけ、他プレイヤーに差をつけようとしたのが始まりである。

ギルド創設時のメンバーはレベルが高くある程度のレアアイテムまたはレアアイテムが入手できる依頼クエストの情報を持ったプレイヤーに限られておりトッププレイヤーの集団だったと言っても過言ではない。

『創設メンバーってことはそこそこのプレイヤーだろうし、レアアイテムを持っても不思議じゃないか…』

「そうだな。それにハルさんの知り合いなら直接どういう意図があるのか聞けば『無理♪』…なんで」

『彼の連絡先知らないもん♪』

「知り合いなんじゃないんかい」

『本当に知っているだけって感じかな♪創設メンバーって言っても100人ぐらいいたしね♪』

「そんなにいたら付き合いがない人間も出てくるか…」

『それにあんまり仲良くなかったんだよね♪メンバー同士で揉め事も多かったし♪』

「ハルさん以外の創設メンバーって冒険者ギルドに残ってないんだっけ」

『ううん♪何人かはいるよ♪』

「その人らは連絡取れないの」

『ううん♪だめもとで聞いてみるよ。ちょっと待ってて♪』

そう言うとはルモニアにZZZという吹き出しが表示された。

このゲームでは自分の状態を簡単に表すため吹き出しなどの表現を使用することが出来る。ZZZは寝ているか席を外していますと言う意味である。



『クイン。1つ聞きたいんだがアルクとか言うプレイヤーについて調べたのか?』

ハルモニアが席を外したことを確認したトウリがクインに尋ねる。

「一応は。ですが連絡先などはわかりませんよ」

『連絡が取れなかったときのこととも考えて少しでも情報が欲しい。分かっていることだけでも教えろ』

「一言で言うとな変わり者でしょうか」

「変わり者ねえ。オンラインゲームじゃ別に珍しくもないんじゃないのか。たとえば私とかフォーとか」

そういつてフォーを指差すデューエ。

「まあネカマやネナベ程度は別に珍しくもないけど」

『私は別にネカマじゃありません！　かわいいものが好きなだけです！』

「私はノーマルだけど。フォーは時々何も知らない男捕まえてアイテム貢がせたりしてたじゃん」

『あれは向こうが勝手に渡してきたんです！』

「まあまあ、お2人共」

クインが止めに入るがフォーとデューエはかまわず口論を続ける。

『そっちの2人はほっとけ。アルクとか言うのがどういう風に変わってるのかさっさと教えろ』

トウリは口論を続ける2人を無視して話の続きを促した。

「私が調べた話の中で気になったのは、所謂お使いに分類される依頼^{クエスト}についてです。トウリさん、あなたが薬草の採取依頼を受けたとしてどのような依頼^{クエスト}を達成しますか」

『質問の意図が良く分らんが、薬草の採取の依頼なんだから薬草を渡して終わりだろう。当然、品質は最高、数は報酬の上限まで』

品質は最高、良質、普通、不良、劣悪の5段階があり、採取系の依頼^{クエスト}では品質が普通のアイテムを納品したときの報酬が記載されており普通よりよければ報酬が増え、悪ければ報酬が減る。

納品するアイテムの数はあらかじめ最低何個、最大何個と決められており最大数を超えてアイテムを渡しても報酬は増えない。

「はい、トウリさんの言うとおり普通のプレイヤーはなるべく高い品質で最大の個数を納品しようとしています。ですがアルクさんは普通とは違うことをしたのです」

『もったいぶるな。どうしたんだ』

「薬草を最大5個まで納品出来る依頼で、霊薬を5個納品したんだそうです」

『…出来るのか、そんなこと』

「ええ、私もこの話を聞くまでシステムをよく理解していなかったのですが、採取依頼のあったアイテムを依頼人に渡す方法は2つあるんです。依頼のあったアイテムを持って依頼人に話しかけての納品。通常はこちらを使用します。もう1つは依頼人にアイテムのトレードを申し込むことです」

『話しかければいいだけなのに面倒な…』

「私もそう思います。それにトレードでアイテムを渡そうとしても依頼品と違う場合、断られますし」

『さっき言ってたことと、ちがうが』

「普通は断られたらあきらめますが、アルクさんはわざわざNPCの依頼人相手に交渉して無理やり受け取らせただそうです」

『交渉？そんなことが可能なのか？』

「トウリさんはあまり営業のほうには関わっていないからご存知ないかもしれませんが、NPCとの交渉はうちでもやっています。依頼の報酬に提示されたのとは別のアイテムを要求したり、特定のアイテムと一緒に納品するからもお金をもらえるようにしたり」

『交渉が可能なのは分かったが何のためにそんなことを』

「アルクさんが受けた依頼は病気の少女の治療の為に薬草が欲しいという依頼クエストだったそうです。ただ何度依頼を達成しても病気は良くなりませんでした」

『それはそうだろうな。病気はあくまでゲームの中の話。簡単な採取依頼や討伐依頼は日を置くと何度でも同じものが出てくるし、そうでないと冒険者ギルドの基本活動である依頼の斡旋なんてできない』

「ですがアルクさんは病気が治らないのはアイテムのせいだと考えられたようです」

『はあ？』

「薬草は普通に使ってもHPが1%回復するだけの回復アイテムの中でも最低ランクのアイテムです。それを何度使っても直らないならHPとMPが全回復する霊薬を渡せば直るかも知れないと」

『分からなくてもないが…。病気は治ったのか？』

「直りませんでした」

『…それは、そうだろうな』

「1度では」

『何？』

「100回、霊薬を5個づつ納品したんだそうですよ。そして最後には少女の病気は完治して元気になりました」

『隠しクエストか何かだったのかそれは。霊薬自体かなり高価なアイテムなんだ何か良い報酬は手に入ったのか』

「本人は何も手に入らなかったと言っていたらしいです。本当のところどうなのかは同じイベントを発生させることが出来ないので確認のしようがありません」

『それは…ユニークイベントってことか？なのに報酬なし？そんな話を信じたのか』

「信じなかったみたいです。それで色々トラブルになったとか」

『そうだろうな…。トラブル云々はともかく、まあ確かに変わり者だな。普通はNPCの病気がなぜ治らないかなんて考えないだろう』

「ええ。それにアルクさんは色んなところで同じ様なことをしているみたいです」

『同じような…。だと。ユニークイベントを複数発見したということか。下手をすれば他のプレイヤーの恨みを買うのではないか』

「実際買っていますよ。今まで受けられた依頼クエストが消えてゲーム内で1度しか発生しないようなイベントを1人が何度も見つける。周りからすればいい迷惑ですからね」

『…ひょっとして冒険者ギルドを辞めたのはそれが原因か？』



『おっまたせー♪』

『ごめんねえ♪せっかく待ってもらったけど、みんな知らないってさ♪』

「結局、どうするかはこのメンバーの話し合いで決めるしかないということですか…」

『うん♪』

アルクへの連絡が取れないとわかったので依頼を受けるかの話し合いを再開する。

イベント開催決定

冒険者ギルドでの話し合いの後、生産ギルドや商人ギルドにも声をかけ、その日のうちに説明会イベントを行うことが決定した。

以下は冒険者ギルドからプレイヤーに対して告知された内容を簡単にまとめたものである。

？新規プレイヤーの獲得及び初心者支援の為に中、上級者による説明会イベントを行う

？説明会イベントは個人、団体を問わず説明側での参加が可能（簡単な審査あり）

？後日、プレイヤーにどの説明が良かったかアンケートに回答してもらい

順位をつけ、上位の者には賞品または賞金を出す

冒険者ギルドの支部長達が説明会イベントの開催についての様々な調整を急ピッチで行った結果、トリス達が依頼した日から6日後に実施されることが決定した。

余談だが、支部長達が調整の為に数日徹夜して倒れそうになっている中、ハルモニアが支部長達を笑顔で励ましつつ、支部長達以上に働き続けた結果、「『冒険者ギルドのギルドマスターはあな（ん）たしかないよ！！』」と支部長達のハルモニアに対する評価が高くなったのだった。

ハルモニア自身は徹夜でテンションがおかしくなっている集団に囲まれてドン引きしていた。

『……皆、かなり怖いよ♪』

◆ 王城北門前広場にて

サヤから少し遅れてログインすると連絡があったので、トリスとユキが広場に設置されたベンチに座ってのんびり待っているように話している時だった。

クインからトリス達3人宛てに説明会イベントを行うことが決定したとの連絡が来た。

「いやゝ。本当にうまくいくとは思わなかったなあ…」

トリスはクインからの連絡に目を通してながら意外そうに呟く。

「うまくいくと思ってなかったんなら、何で協力したのよ」

ユキは呆れたような声でトリスに質問する。

「冒険者ギルドはどんな感じなのか1度見てみたかったのもあったし、試しに協力してみるのも良いかなって思ってた」

「まあ、私は良いんだけど」

話している途中にクインからの連絡を見てテンションを上げたサヤからのメールが届く。

「…サヤちゃん無駄にテンション高くなっているみたいだからフォ

ローお願いね」

うんざりしたような声になるユキ。

「はぁ…。サヤはなんであんなにアルクさんの好感度が高いかね」

「さぁ。あの時、聞いた話に感銘を受けたとか言ってたけど…」

「今の所、アルクさんが何か悪巧みしてるってことも無さそうだから別に良いんだけどね…」

「…寂しいのね」

「なっ、違う！」

トリスはあわてて否定するがユキは取り合わず話を続ける。

「今までサヤちゃんは私達以外、そこまで親しくなった人っていなかったのに突然、それも男の人ですものね」

「男かどうかなんてわかんないだろ。ゲームなんだし…」

トリスはだんだん声が小さくなっていき、最後には聞き取れないぐらいの声で反論する。

「はいはい。分かってる、分かってる」

「絶対分かってないだろ！」

「何が分かってないの？」

2人は話に集中していたので近づくサヤに気づいていなかった。



「もう、2人で何の話をしてるのよ…」

ユキから話していた内容を説明されたサヤは呆れたように呟く。

「気になるのよ。私もトリスもサヤちゃんのこと大好きなもの」

「私は違うぞ！ いや、嫌いって意味じゃないぞ」

トリスはあわてて否定するがサヤは分かっているという風にキラの手を上げて2人の話を止める。

「心配してくれてありがとう。でも今回ののは別にそんな話になるようなことじゃないでしょ！」

「あら、そんな話ってどんな話」

サヤの言葉にユキは即座に反応して茶々を入れる。

「今回はアルクさんの言った通りになったのがすごいって話であって、別に私が…私がアルクさんに…」

「アルクさんに？」

途中からもしもじして話さなくなったサヤにユキは続きを促す。

「アルクさんにこっ好意があるとか、そんな話じゃないの！！」

恥ずかしさを誤魔化す様に絶叫する。

説明回に戻る

◆7日前 緊張からの現実逃避によりアルク暴走中

『あとは新聞とか雑誌を作るって手もありますね』

「はい？」

『先ほどの写真に文章を加えた物を作って売ることが出来ます。これも知名度がないと弱いので初心者向けではないですが…』

暴走状態のアルクは3人の話を聞いていなかったなので、既にカメラを使う気になっているのに説明を続けた。

「はあ、そんなこともできるんですね」

トリスは若干困惑したような反応になったがアルクは気にせず続ける。

『ええ、紹介した以外にも出来ることはたくさんありますし、カメラに限りませんがたとえ今出来なくてもゲームとして楽しめる内容なら運営に提案すると言う手もあります』

「運営に提案なんて出来るんですか。プレイヤーの意見を聞いてゲームバランス変更するとかはありそうですね」

『可能です。たとえばギルドもプレイヤーからの提案で追加されたシステムです』

「えっ、ギルドって公式でも紹介されているし、元々あったものなんじゃないんですか」

『今でこそ公式で紹介されていますが、元々ギルドと言うのはプレイヤーが勝手に言っているだけでした。』

「勝手に言っただけ…ですか？」

『正式サービスが始まって少しした頃、当時の有名プレイヤーが集まって冒険者ギルドと言う組織を立ち上げました。最初はそれこそ依頼の情報を共有する為だけのものだったのですが、冒険者ギルドだなんていかにも名前だったからかどんどん人が増えていきまして…』

「どうなったんですか？」

『システムの拘束力は何もない集団ですからね。ペナルティもあつてないようなものでしたから当時はものすごく荒れましたね。思いつく限りのろくでもないことは殆ど発生してたといっても言い過ぎではない状態でした』

「運営は何もしなかったんですか」

『運営はプレイヤー間のいざごさには一切対応しないとホームページで宣言していますし、利用規約にも同じような内容が書いてありますよ。…当時もトリスさんと同じ反応をする人が殆どでした』

トリスは慌ててゲームの公式ホームページを立ち上げ確認する。

「本当だ…」

『個人的にはプレイ料金を取られているわけではないので、ある程度は仕方ないと思ってます』

「ギルドはどうやって作られたんですか？」

『企画書を書いて運営に送った人がいたんですよ』

「きつ企画書ですか」

『ギルドの必要性とシステムとして最低限必要な機能などが分かりやすく書かれていたそうです。』

本格的なプレゼンテーションにも使えるような資料だった為、その筋のプロの方が作成したのではと話題になったが結局誰が作ったのかは不明なままとなっている。

『例として大きなところをあげましたが、プレイヤーが企画したイベントとかで実施可能なら運営は検討してくれるということですよ』

「はあー。すごいのかどうだか良く分かりませんね。運営仕事しろって気も」

『そこはまあ…。ある程度は仕方がないかと。…すみません。本題からそれてしまいましたね。』

「いえいえ、面白い話だと思います」

アルクとトリスが雑談に入っているとき、サヤがボソッと呟いた。

「それって皆知っていることなんですか？」

話を振られたアルクは苦笑を浮かべながら返答する。

『最近始めた人は知らないかも知れませんが。今では大手のギルドぐらいしかイベントの提案自体しませんし。』

「もったいない…」

『はい？』

「もったいないじゃないですか！！」

突然、大声を上げる。

「落ち着けー」

「サヤちゃん…」

トリス達は呆れたような声でサヤを止めようとするが、サヤは止まらず続ける。

○投げ

「せっかく楽しそうなのにもったいないじゃないですか」

サヤの言葉を聴き、また面倒なことをと思いつつトリス達は反論する。

「知ってたとしても、いくらなんでも1から全て準備するのは大変だし、さっきの話で出てきた企画書？も普通に考えたら用意できないだろ」

「そうよ、サヤちゃん。学校なんかでも文化祭とか準備にかなりの時間をとられるじゃない。それと一緒にだと思うとそこまでやろうとはとても思えないわ」

2人に否定され少し勢いが弱まるサヤ。

「うー。でも…」

□

3人の口論とも呼べないやり取りが行われていた頃、暴走中のアルクはあることに気づく。

……うまくすれば、この3人を今すぐ追っ払えるんじゃないか……

ある意味、最低なことを考えているのだがキャラの表情にでるわ

けもなく、さわやかな笑顔の裏で頭をフル回転させて3人をどうにか追い払う方法を考える。

……くつくくはあはっあははあはははは……

……特に意味はないっぜ!!……

暴走した頭でついに1人で脳内会話を始めた人間が考えていることなど纏まる筈もない。

……だが、俺は行く。行って政界を救うぜ!!……

せめて世界を救うぐらい言って欲しい気もするが、どちらにしろまともな状態ではなかった。

□

『サヤさんが言っていることも分からなくはないですね。ではこういうのはどうでしょう』

暴走した末にアルクは面倒ごとを冒険者ギルドに丸投げすることを思い付いたのだった。

その際、初心者支援の重要性やイベント開催によるプレイヤー全体の利益について青臭い台詞を書きまくった結果、脳内からその日の記憶は削除されることになる。

後日、その日語った内容を詳細に説明され本気でゲームを止めることを考えることになるのだが、それはまた別のお話。

鳥は遠距離通信の基礎だよね

■ イベント当日 辺境 ※アルクサイド※

さあて、どうする。

……

『おい』

1人で倒すのは無理としてどうにか他プレイヤーを巻き込めないものか…

『おい！』

うーん。

『わしの話を聞かんか！！』

＊村長の攻撃！

＊アルクはひらりとかわすと、村長に足払いを放った。

『げふっ』

……

……

『大丈夫ですか？』

『大丈夫に見えるのか…』

『うつぶせに倒れたままの返答は少し引くので起きて下さい』

『いたいけな老人に足払いをかけておいて言うことはそれだけか！
！！』

『正当防衛を主張します。』

最近、王都のほうでは裁判制度が導入されたと聞いている。
NPCへの態度があまりにひどかったプレイヤーにとんでもない
慰謝料が請求されたのだとか。

だが、今回は先にあちらから攻撃されたのはログからも明白、絶
対勝って見せる！！

『そんなこと言っとる場合か。おぬしが考え込んでいる間にモンス
ターがどんどん王都の方へ進んどるんじゃ』

……おおっ。いつの間にやらかなり離されている。
無駄にでかいので一歩一歩の距離がすごい。

あのままだと、あと1時間もしないうちに王都につくなあ。

『些細なことはひとまず置いておきましょう』

『…おぬし実は余裕があるのか？』

『いえ、まったく』

『……』

村長はそれきり沈黙したがそれでどうにかなるわけでもないのとおりあえず他のプレイヤーに状況を連絡するか。

その場にはいないプレイヤーにまとめて連絡することは難しいのでアイテムを使う。

□ アイテム説明 「ソーン鳥」

入力した文章を指定した場所にいるプレイヤーに強制的に機械の合成音で

聞かせることが出来るアイテム。

ただし、不適切な言葉などを使用できないようにシステムの方で入力した

文章を勝手にアレンジする機能があり、伝えたいことが伝わらないことがある。

そもそも強制的に聞かせるという部分でクレームが多数あり、今ではほぼお目

にかかれないレアアイテムである。

□

＊ソーン鳥使用

・発動場所

王都

・設定文章

『南より、巨大モンスター接近中。王都が壊滅する恐れがあるので
手の空いているプレイヤーは討伐に参加されたし』

それ、飛んでいけ。

こっちもこれ以上離されないうちに動くとしますか。

もうじき決戦だと思う

いきなりですが、食べられました。

モンスターに追いついた途端、突然画面が真っ暗に：

PCがフリーズしたのかと思ったがステータス画面なんかは普通に確認できるので、周囲が暗くなったのだと気づく。

気づいたところで松明なんかは持っていないので、どうにもならないけどね！

……

とりあえず進めなくなるまで直進。

進めなくなったなら左に、左に進めなければ右に。

1歩1歩、リアルマッピング。

地味！

辛い！！

明かりプリーズ！！！！

◇ アルクが道？に迷っている頃、王都中央広場にて

「トリちゃん、次どっち」

「えーと、次はユキが行きたがってた演武だから、こっちだ」

「はーいって、ちょっと待って」

「うん？」

クインを発見したサヤがトリスに待ったをかける。

「クインさーん」

サヤの呼びかけに気づいたクインが笑顔を浮かべながらサヤたちに近づいて来る。

「皆さん、楽しんでおられますか」

「はい。とっても」

「こんなに人が集まるとは思っていませんでした」

サヤが笑顔で返しつつ、トリスも説明会イベントの盛況ぶりに感嘆したように答える。

「楽しんでいただいているようで何よりです。各方面に参加を呼びかけたかいたがありました」

当初、プレイヤー主催のイベントとして開催する予定だったが冒険者ギルド以外からの参加を呼びかけたところ予想以上に人が集まり、賞金、賞品、開催場所などプレイヤーが提供出来るだけではないきれないほどとなり、運営にも協力を要請することになった。結果、簡単な説明どころか王都全体を会場とした大イベントとなっていた。

「これから、演舞を見に行くところなんですけど、クインさんも一緒にどうですか」

「申し訳ないですが、冒険者ギルド発案と言うこともあって運営に関わってしまして、あまり長い時間は支部から席をはずせないもので」

冒険者ギルドはイベント開催中の突発的な事態に早急に対応するため、有志を募りある程度プレイヤーだけで何とかできるようにと支部長クラスを筆頭に準備を行っている。

「はあー。なんか申し訳ないです。私達の依頼の為に…」

「いえいえ、裏方も楽しいですよ。それにこれほど大規模なイベントに関われる機会なんて早々ありませんから、貴重な体験です」

サヤたちが談笑していると突然、大きな声が辺りに響いた。

「家に引きこもってる紳士淑女共。喜べ、貴様らが社会復帰できるように王都を全部ぶっ壊してやることにしたぜ。興味のあるやつは王都の南を確認してみな。無理だとは思いますが防げるもんなら防いで見やがれ。くあはははははは」

周囲が突然の事態に困惑している中、クインは即座に冒険者ギルドに連絡をつけ王都の南方面を確認するように依頼する。

「何なんでしょうか今のは、悪戯」

ユキが疑問を口にするのとクインが現状を伝える。

「今のは、ソーン鳥というアイテムの効果です。設定した言葉を周囲に強制的に聞かせるアイテムなんですが、設定した通りには喋ってくれないので正直使えないのでプレイヤーの間では運営の悪ふざけとも呼ばれているアイテムです」

「と言うことはやっぱり悪戯ですか…」

せっかくのイベントに水を差されたことを残念だと思い少し暗くなる。

「…悪戯ならよかったんですが」

「えっ」

「今、冒険者ギルドで確認しました王都の南からこれまでに見たことも無いほどの巨大なモンスターが接近中とのことです」

「それって」

「このままだと先ほどの言葉通り、王都は壊滅します」

歌うように

◇迷子？中のアルク

一步一步を踏みしめて
地味、つらい、飽きた。

行けども行けども周囲真っ暗。
きつとお先もまっくらだ。
へい。

…本気で飽きた。
もう王都ほっというて止めようかな。

と思っていたら突然周囲が明るくなった！
ってなんかダメーシ受けてる！！
床が壁が赤くなってる！！！！

■王都南側平原 巨大モンスター前

ソーン鳥の暴言を聞いたプレイヤー達は本当にモンスターが接近していることを確認した後、迎撃に向けて準備を開始していた。

突発的に発生した事態ではあるが冒険者ギルドがイベント用に連絡網を構築していた為、何とかモンスターが王都に到着する前に戦える体制を整えることが出来た。

そんな中、サヤ達3人はクインに多人数でのモンスター討伐を最

前線で見学しないかと誘われ巨大モンスターが見える位置まで移動していた。

サヤ達以外にも結構な人数が見学に来ており、説明会イベントの続きといった雰囲気となっていた。

見学組みのプレイヤーが見守る中、モンスター討伐の為に集まったプレイヤー達が弓や攻撃魔法などの遠距離攻撃を開始したがモンスターは意に介さず王都へ向けて移動を続ける。

「効いてるように見えませんね」

ユキは落胆したように呟く。

その言葉を聴いたクインは特に気にせず、言葉を発する。

「これからですよ。多人数での戦いが得意なギルドがそろそろ出てくる頃です」

クインの言葉が終わるのを待っていたかのように突然、赤く巨大なビームのようなものがモンスターに向けて放たれた。

ビームは10秒程度照射され続け、モンスターは足を止めた。

「…何ですか、あれ」

あまりの光景にサヤはうわあと呆れたような声を上げつつクインに説明を求める。

「あれは合唱隊の攻撃魔法ですね。皆さんは攻撃魔法についてはどの程度ご存知ですか」

クインの確認に対してトリスが答える。

「えっと、確かこのゲームは魔法は発動方法が複数あるんですよね」

□魔法の発動方法について

1. メニューを立ち上げ発動したい魔法を選択する
(ショートカット設定可能)
2. 魔法に設定されている詠唱文を読み上げる

1を詠唱破棄と呼び、魔法の即時発動が可能だが詠唱時と比べて威力が

2分の1でMP消費が2倍となる。
マジックポイント

2の場合は威力、MP消費共に1より優れているが発動までに時間がかかることと

詠唱するためにはボイスチャットの設定を周囲に聞こえるようにする必要がある為

プレイヤー相手の魔法の発動前にばれてしまうというデメリットがある。

□

「こんな感じであってますか」

トリスは記憶している情報に間違いが無いかクインに尋ねる。

「はい、その認識であってます。合唱隊が行ったのは詠唱発動の応用です。複数人が同時に同じ魔法を詠唱することで効果を拡大させることが出来るんですよ」

ただし、詠唱のタイミングも合わせないといけませんが続けたクインの言葉にトリスは頭の中で自分達が魔法を唱えている光景を

想像した。

「それって結構難しくないですか。普通に同じ場所にいても合わせられないのに、ボイスチャットでなんて」

トリスが想像した通り、詠唱のタイミングを合わせるというのは2，3人でもそれなりに難しい。

「ええ、相当難しいそうですよ。合唱隊は複数詠唱を実現するためにプレイ時間の大半を練習に当てていると言う話ですし」

ですが練習するにたる威力でしょうとクインは歩みの止まったモニターを見ながら続けた。

ちなみに合唱隊は所属しているギルドメンバー30人全員がリアル知り合いであり、ゲームのみならずリアルでも詠唱の練習をしている。

イベントで目立つことに並々ならぬ情熱を傾けているプレイヤーだけが複数詠唱を可能とするのである。

「ふっふふふ…」

「どうしたのサヤちゃん」

突然、笑い出したサヤにユキが怪訝そうに尋ねる。

「さっきの人たちがモニターに向かって呪文とか一斉に唱えているところを想像したら…ぷぷっ」

サヤの言葉を止めるようにクインが言葉を発する。

「それは禁句です」

複数詠唱というか魔法詠唱そのものが間抜けっぽい、中二くさい、他人に聞かれたら恥ずかしいなど大変不評なのは余談である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9918t/>

一緒に遊ぼう。

2011年11月21日12時39分発行